

# 恐慌の週期性に関するA・ベナリの見解

重 田 晃 一

はじめに

本稿は『ヴィルトシャフツウィッセンシャフト』誌一九五四年一号所載の、A・ベナリ「独占期以前の資本主義における循環性恐慌の週期性について」と題する論文<sup>(1)</sup>の紹介である。この論文の内容が、マルクス主義恐慌論研究の現段階的水準に照らし、如何なる評価を与えられるべきであるかについては、今の筆者にはその準備も能力も充分でない。とはいえ、以下の諸点を考慮に入れるとき、ともかく紹介に価すると思われるので、とりあえず筆をとることにした。

衆知の如く、資本主義的再生産は循環的性格をとつて、即ち恐慌、不況、活況および高揚という産業循環の経過をたどつて発展する。従つて恐慌はほぼ一定した週期をもつて爆発するのであつて、その結果「恐慌を資本主義の基本矛盾とこれから展

開する一層進んだ諸矛盾とから説明するだけでは、まだ、なぜ恐慌が一定の週期をもつて反覆するのか、どのような基礎の上に恐慌の週期性が展開するのか、ということは説明されない<sup>(2)</sup>」で残されている。ところでこれまでの恐慌論についての諸研究は、恐慌の週期性の解明の出発点を、資本論第二巻第二篇第九章の有名な章句その他に依拠して、固定資本に特有の回転様式に求めてきた。しかしながらこの点についての立ち入った研究は例外に少く、<sup>(3)</sup>更にその成果についても、未だ検討の余地が残されているのがこの問題の研究の現状ではあるまいか。こゝに紹介しようとするベナリの論文についても、それが全面的にこの問題を解決しているとはいえぬが、少くともこの問題への接近方法において或る種の斬新なものが提出されているように思われる。固定資本の回転を労働手段の再生産という視角と結合

## 恐慌の週期性に関するA・ベナリの見解(重田)

し、この点より恐慌循環の週期性の問題にさらに一段と深い分析を与えようとする方法が即ちこれである。

東独の指導的経済学者F・エルスナーも、その著『経済恐慌』の中に「恐慌の週期性」と題する一章を設け、この問題の解決にかなりの力を注いでいるが、なおかなりの難点を残していた。筆者の見るところではベナリの本論文は、このエルスナーの恐慌論体系を前提として、その不十分な部分―恐慌の週期性の克服と恐慌論研究の一段の深化とを志向しているかに思われる。すでに我が国でも、エルスナーの当該著述の翻訳が刊行され、それがかなり広汎に流布している点を考慮するとき、本論文の紹介も必ずしも無意義ではないであらう。

最後に、これは筆者の乏しい文献的知識による推断であるが、現在の東独においては、恐慌論の理論的研究にあてられた文献は意外に数少いようである。とすれば我々は、先のエルスナーの著述と共に本論文を顧みることによつて、彼の地におけるマルクス主義恐慌論研究の水準をほぼ推測することができるのではあるまいか。

これらの諸点に鑑み、以下の本論ではベナリの論文の内容を忠実に紹介、要約することにして、筆者の補足、意見はすべてこれを「註」と「むすび」に譲じた。<sup>(4)</sup>とはいえ、筆者の問題意

識―関心に制約されて、紹介の仕方に精粗繁簡の免がれ難いことは言うまでもない。

## 六八

註(1) 原題は Arne Benary, "Zur Periodizität der zyklischen Krisen im vormonopolistischen Kapitalismus", *Wirtschaftswissenschaften* Heft 1, 1954, SS. 63~80  
本論文の筆者A・ベナリ(一九二九―)は、現在ハルリンのドイツ科学アカデミー経済研究所に勤務する新進のマルクス主義経済学研究者である。著書論文としては左のものがある。

*Atinelle Probleme der Agrartheorie des Marxismus-Leninismus*, Wirtschaft Verlag 1955.

Zur Entstehung der ökonomischen Lehre von Karl Marx, *Wirtschaftswissenschaften* Heft 3, 1954

Über den ökonomischen Zusammenschluß von Stadt und Land in der Deutschen Demokratischen Republik, *Wirtschaftswissenschaften* Heft 6, 1954

Zur Funktion des Wertgesetzes im System der ökonomischen Gesetze des Sozialismus, *Wirtschaftswissenschaften* Heft 1, 1956

註(2) F. Oelßner; *Wirtschaftskrisen* Bd. 1, 5. Auflage,

S. 96 邦訳一六頁

(3) ちなみに古い文献としては、K. Kautsky: *Finanzkapital und Krisen, Neue Zeit, Bd. XXIX, I, 1911*  
 R. Hierding: *Das Finanzkapital* 当該箇所。戦後の日本の文献では川崎巳三郎『恐慌』宇野弘藏『恐慌論』玉野井芳郎『景気循環と信用』、『信用理論体系』第一部上巻)等がある。

(4) 紹介の仕方について技術的なことを二三述べておく。原文は最後の総括の前までは一気に書き流され特別の段落はないが、紹介の便宜上筆者の手で四つの段落に別けておいた。註ならびに傍点は特にことわりない限り筆者のものである。『資本論』の邦訳頁数は長谷部訳青木文庫版により、『金融資本論』の邦訳頁数は岡崎訳岩波文庫版による。原書については前者はインステイテュート版、後者については一九五五年新版第二刷の頁数を示す。

### 一、準備的考察

恐慌の週期性の問題を考察する場合、その基本的規定を資本論第二卷第二篇第九章の次の規定に求めるのが普通であるが、

恐慌の週期性に関するA・ベナリの見解(重田)

その点については、ベナリも他の研究者と異なるところはない。

即ちマルクスは言う、「だから、資本制生産様式の発展につれて充用固定資本の価値量および寿命が発展〔増大〕するのに比例して、産業・および各特殊の投資における産業資本・の生命が発展〔延長〕して多年——たとえば平均して十年——にわたるものとなる。……資本がその固定的成分によつて繫縛されている連結的諸回転からなる幾年にもわたるこの循環により、週期的恐慌、すなわち、事業が弛緩・中位の活気・ごつたがえし・恐慌の継起的諸期間を通過する週期的恐慌の物質的なひとつの基礎が生ずる。」<sup>(5)</sup>(*Kapital* Bd. II, S. 180 邦訳六分冊二三八頁)

このマルクスの論述をとりあげてベナリは言う、これによつて「マルクスは原則的には循環性の原理に関する問に答えている」と。そしてこの問題に対する研究の方向を次のように規定している。「だから週期性の問題は、恐慌循環における固定資本の役割の問題とはほぼ一致する。研究は固定資本の回転が週期性のひとつの物質的基礎、即ち真に経済的な基礎であるというマルクスの確認から出発しなければならないが、その際何によつて、またいかにして固定資本の回転がこの役割を演ずるかを明らかにすることが問題である。」そしてベナリはその分析を、

恐慌の週期性に関するA・ベナリの見解（重田）

七〇

この固定資本の回転を生み出す諸契機、この回転の諸側面の考察から始めている。

第一点——固定資本の回転は、一方では技術的な過程、即ち勞働手段の漸次的磨損という基礎（それぞれの生産様式に固有の労働過程の簡単な諸契機のひとつ）から発生する。他方、この消耗された勞働手段の規則的反覆的な補填は、資本制商品生産のもとでは次の如き形態変化、即ち、新たに生産される商品への勞働手段の磨損部分の価値の漸次的移譲↓商品の実現によるこの価値部分の貨幣形態への転形↓勞働手段↓生産資本への再転形という形態変化（固定資本の回転↓生産関係・価値関係表現）によつて媒介される。だから、勞働手段の素材的補填の資本制的形態である固定資本の回転の考察においても、絶えずこの二つの側面に注意せねばならぬとベナリは言う。

第二点——マルクスにおいては資本の回転（Umschlag）は即ち資本の循環（Kreislauf）であり、しかもそれは孤立な経過としてではなく週期的な経過として理解されている。従つて既投下資本の一構成要素である固定資本の回転もまたある期間を、即ちそれが経過すると固定資本の規則的な補填が行われねばならない一期間（週期）を内包している。ところで固定資本

を補填するためには、補填されるべき固定資本の内実である勞働手段があらかじめ生産されていなければならぬのであるから、この固定資本の回転期間は、また同時に勞働手段の再生産期間でもある。ベナリは言う、「したがつて固定資本の回転は、孤立的な形では把握されえないのであつて、固定資本の回転は、それが直接的生産過程のみならず、資本回転、商品流通をも包含するところの勞働手段の再生産過程の一側面であるという事實の考察のもとにおかれる場合にだけ把握される。更にまた、勞働手段の再生産過程は、それがその一部分であるところの社会的總生産と同一の諸法則によつて支配されている。」ところでこの点は、恐慌の週期性とその「物質的基礎」としての固定資本の回転とを結びつける際のベナリに特徴的な分析視角となるものであるから、特に留意を要する。

第三点——固定資本の寿命については、自然的磨損によつて補充される技術的磨損と道德的磨損とが区別されるが、恐慌の週期性との関係においては特に後者が重要である。即ち資本制生産様式のもとでは生産の無政府的性格のために、主要な部門の固定資本の主要な要素はほとんど一様な寿命をもつに至るが、他方では同時にそれ（固定資本）は飛躍的、突発的に拡大される。

そしてその際に固定資本の道德的磨損は価値革命の一現象形態として大きな役割を果すのである。

最後に——ベナリーは、「固定資本の生活過程は資本制生産の循環的経過に繫縛されている」という視角から、このような生産の循環的發展を呼び起すところの諸前提条件について簡単に触れている。第一にあげられているのは、「機械制工業が決定的役割を演ずる發展段階への資本主義の突入」である。

機械制工業に立脚する資本制生産の發展は、生産裝備の膨脹、生産の集中、資本の有機的構成の高度化、総資本中の固定資本の比重の高度化を意味するが、他面ではその結果として生ずる生産力の増大は、この生産力の形式である生産諸関係の資本性的性格と絶えず矛盾衝突し、こゝに資本主義に特有の生産の循環的發展の基盤が形成される——ベナリーはこう考えているようである。ところでこのような生産の不断の膨脹と収縮が可能となるためにはその前提条件として「資本にとつて自由に処分されうる追加的勞働力の存在」と「生産の急激な膨脹のために必要欠くべからざる生産能力の存在」とが必要である。前者については資本の有機的構成の高度化を媒介とする産業予備軍の創出がこれを解決する。後者については資本の有機的構成

恐慌の週期性に関するA・ベナリーの見解(重田)

の高度化、第一部門の第二部門に対する不均等發展に表現されているように、資本主義は勞働の生産性を絶えずその従前の到達水準を遙かに越えて上昇させることによつて、生産の間歇的拡大に照応する生産能力の存在、乃至それを短時間の中に創造する可能性を保証する。

かくてベナリーは、一八二五年より一八八二年までの恐慌が勞働手段の拡大再生産過程におよぼした影響を歴史的に簡単に回顧して、次の様に述べている。「明かにこのような強力な投資の結果、総資本中の固定資本部分は総資本中の勞働手段生産部分と同様に増大した。かくして勞働手段の拡大再生産過程は、循環の経過に対して決定的な意義を獲得した。」そして続いて言う、「恐慌の圧力のもとに、必要欠くべからざる投資は大部分活況期に、そして部分的には繁榮期に生じた」と。では固定資本のこの様に飛躍的に起る拡大は如何にして生ずるのであるか。ベナリーの分析はいよいよ問題の核心に迫つて行く。

二、活況と高揚の基礎としての、恐慌の爆發の基礎としての固定資本の再生産過程

——附、エルスナー批判——

恐慌の週期性に関するA・ベナリの見解（重田）

恐慌とそれにとまなう不況とによつて価値法則は暴力的に自己を貫徹し、均衡が一時的に回復される。過剰生産は中断され破棄されて利潤率が徐々に回復する。こゝに再び活況の条件がととのつてくる。生産の拡大の直接的な刺戟の原因が何であるか、或はそれがどの生産部門に現われるかについては、歴史的に具體的な条件に従つてさまざまであるだろう。だがいずれの場合にも生産設備の拡大の努力、固定資本の新投下、労働手段の需要が生ずる。この新需要——それが第一部門の分野から、或は第二部門の分野から起るにしろ——は労働手段の生産の回復に導き、それはそれでこの新需要によつて原料生産の活動を呼び起す。第一部門の生産の回復とともに就業者数、大衆の消費力が上昇し、かくてそれは第二部門の活動を呼び起し、今やこの交互作用が絶えず高揚する段階の上に生れる。

このようにして急速に増大する生産手段の需要は生産手段の価格の上昇を、従つて第一部門における利潤率の上昇をもたらす。全く同様に消費手段の価格が上昇し、かくして第二部門の利潤率が上昇する。ところで、「こうした価格の上昇は、根本的には労働手段を生産する工業の方が他の部門に比して、一層強力であり、継続的である」とベナリは述べて、その点を以下

のように論証している。

集約的拡大再生産は<sup>(7)</sup>一方では資本の有機的構成の高度化を、他方では流動資本に対する固定資本の割合の高度化を意味する。前者は第一部門の第二部門に対する不均等発展を必至化し、後者は第一部門の内部では労働手段の生産が原料の生産に比してより急速に成長せねばならぬということを意味する。とすれば当然に、あらゆる部門の中で労働手段の生産がもつとも急速に成長せねばならない、ということは明らかであろう。というのも、労働手段工業の能力の上昇こそが、他のすべての諸部門の能力の上昇の前提であるからである。しかしそのことが可能になるためには、生産の集積の程度が、更に労働手段工業の資本の有機的構成の高さが、その増加の程度において他の諸部門のそれを凌駕していなければならない。ところで労働の生産性が与えられている場合、一工場の建設期間は投資が大規模であればある程長くなるので、その結果労働手段工業における投資は、他の諸部門の投資よりも緩慢にその効果を發揮することになる。かくてベナリは、「労働手段市場では、供給の需要に対する一層長期にわたる強固な跛行が活況期と高揚期の大部分の間では不可避的である」と結論する。これに反して第二部門に

おいては、供給はさほど長期にわたつて激しく需要に立ち後れることはない。何故なら、① 労働手段の生産性の上昇の結果、こゝでは需要はそれ程飛躍的に上昇しない（産業予備軍はやつと除々に吸収される）、② 第二部門における投資は、第一部門のそれに較べて急速に生産の開始に効果を及ぼすので、供給は相対的により急速に増大しうるのである等々。

有機的構成の高度化は通例労働手段工業から出発するという点についてはすでに述べた。その際、相対的により高度な有機的構成を有する経営では特別剰余価値、特別利潤が形成される。ところでこれもすでに指摘すみのこの部面における供給の相対的不足による価格騰貴を考慮に入れるとき、これらの諸経営では特別に高い超過利潤の獲得が可能となり、<sup>(8)</sup> その結果労働手段工業における利潤率は他部門に較べて一層激しく上昇するであろう。ベナリは言う、「労働手段工業に投入された諸資本の平均以上の価値増殖は、資本制生産の無政府性を考慮に入れるとき、投資口を求める資本の殺到——経済的に必要な限界を越え、とゞのつまり不均衡をもたらさざるをえない——をもたらしうことになる。」

以上のように、ベナリは利潤率の不均等を媒介にして、第一部門、とりわけ労働手段生産部門における過剰蓄積、過剰生

恐慌の週期性に関するA・ベナリの見解（重田）

産の傾向（不均等発展の不均衡発展への転化）の必然性を論証した。ところでこの傾向は信用制度と株式制度とによつて更に一段と強められる、とベナリは言う。

技術の発展、生産の集積にともない、生産に長い労働期間を必要とする生産物や、大規模な生産装置を必要とする生産物の製造には、もはや個々の資本家によつては資金の供給が不可能となつてくる。活況とともに投資活動が活激化するとき、このような巨大な計画に対する資金供給を可能にするものこそ、銀行による資本信用である。ところで銀行資本家による信用供与の対象の選択の基準もまた利潤機会であるから、「銀行による巨大な日々増大する資本の集中は、平均以上の価値増殖度を有する部門への資本の流入を要請するが、その結果この部面における過剰蓄積と過剰生産の傾向は更に強められる」であろう。

更に、株式制度の拡大と普及とは配当率を媒介にして、一方において資本の集中に促進的に作用すると共に、他方では株式資本の或る部面より他の部面への移動を容易にすることによつて、資本投下の個々の部面への分裂に影響を及ぼす。かくて資本投下はもはやますます調整されては行われ得なくなり、その結果、上述の傾向は更に一段と強められる。

以上の諸論述を締め括つて、ベナリは言う。固定資本の新投資、それにもなう集約的拡大再生産は、「循環から始まつて循環に達する労働手段の需要の上昇が経済の高揚の出発点であり、基礎であるという点で、活況および高揚の基礎である。」そしてまた、「固定資本の週期的拡大が循環的高揚の物質的基礎となるその程度に依じて、それは一定の時間的へだたりにおいて循環的恐慌の物質的基礎とならざるをえない。」と述べて、この点の検討へと進んでゆく。

活況の開始とともに着手される投資は直ちには生産の開始に、従つて供給と需要との関係に効果を及ぼさない。開始された投資活動とこれら新能力の生産の完成との間の期間中、供給はすべての部門において、とりわけ労働手段市場において需要に立ち後れるので、経済は繁栄を続ける。新工場乃至拡大された能力の生産が完成すると、形勢は全く一変する。とりわけ今やこれらの工場が投資材に対する需要の側から排除されて、それ自身の生産物をもつて市場に現われるので、供給は急速に増大する。更に資本の高度化した有機的構成が、市場の状況のためにこれまでは価値増殖度に影響しないので、それと反対に、それをもつとも有機的構成の高い経営で吊りあげていたのが、今

や利潤率をそれに先立つ循環の平均水準以下に低めんとする傾向をもつに至るので、価値増殖の条件は極度に悪化する。

かくて商品の実現の条件は悪化し、投資活動もまた不振となる。ベナリは言う、「労働手段に対する強度の需要が高揚の基礎であつたが、今や労働手段に対する不振に陥いつた需要が総生産水準がさつぱり、或はほんの僅かしか上昇しない基礎となる。」その際過剰蓄積の結果、過剰生産の危険は労働手段生産部門において最も大規模に存在するであろう。更に労働手段の圧倒的部分は少量づゝの再生産を排除するということを考慮に入れると、生産縮少の危険もまたこの部門において最大となるであろう。他方ではその結果、第二部門においても極度に増大した供給に対して需要の方はてんで増大しない。今や第二部門に始まつた価値増殖の困難は第一部門の商品に対する需要を押し下げ、かくして原因と結果とは相互促進的に作用する。ところで、このような生産と市場との矛盾がどの生産部門で公然たる爆発に達するかは、言うまでもなく当該恐慌の特殊な条件によつて制約されている。

資本主義に固有の拡大的發展の傾向は一方において市場の消化力を増大するとはいへ、その發展とともに急激に増大する生産

力はより早期に激烈に市場と矛盾し、衝突するに至る。ところで資本主義の発展とともに発生する高揚の期間の短縮、不況の期間の長期化の傾向、或は全体としての循環期間の短縮化の傾向については、ベナリはその一扼を次の点に求めているようである。「上昇した生産力は、開始された投資と新たに創設される工場の生産の完成との間の時間的へだたりが短縮される限りに於いて、高揚を短縮する如くに作用する。」

さて高揚終焉期の状況は、今や明かに爆發が迫っているものゝ、いまだなお潜在的な過剰生産によつて特徴づけられるが、この過剰生産を潜在化せしめる諸要因の一つは、ベナリによれば流通信用である。この流通信用は資本家達をして貨幣の現実の還流に頼らなくても生産を続行できるようにさせることによつて再生産過程を加速化するが、それは同時に不比例の形成を隠蔽する。ところで信用が不比例を押しすゝめることが長ければ長いだけ、それだけ生産は分配関係によつてもうけられた制限を乗り越えて拡大され、結局は更に一段と激しい恐慌に襲われるであろう。マルクスの所謂「信用主義 (Kreditsystem) より重金主義 (Monetarysystem) への突然の変転」(Kapital, Bd. III, S. 583, 邦訳 一一分冊 七六〇頁) を随伴現象とする恐慌

恐慌の週期性に関する A・ベナリの見解 (重田)

の爆發についてベナリは述べている。「従つて資本家達は支払をすることができずために現金を手に入れようと販売に必死となる。まさにそれだから現金が乏しいのだ。同時に価格が動揺し始め、そのあげく売上から債務を支払うことができなくなる。恐慌は利潤率の低下傾向が、上昇する需要の結果、これまで価格と利潤の上昇を惹き起してきた諸要因に打ち克つて、自らを貫徹するその瞬間に発生する。」

さて、恐慌循環と其の際に果す信用の役割、恐慌循環と流通信用・資本信用の内的関連づけをめぐるベナリの見解は、当然にエルスナーの著書『經濟恐慌』<sup>(10)</sup>における恐慌の週期性に関する論述と対立する。以下ベナリによる批判を紹介しよう。

第一点——エルスナーは恐慌の爆發の直接的契機を、要約すれば次のように考えているようである。資本家達は景気の絶頂で固定資本を更新しようと思うが、償却部分は銀行に預けられていて遊んでいるのではない。ところが資本信用は手に入れないか、入れられるとしても非常に困難である。労働手段の価格は非常に高く、商品の販売によつて貨幣を得ようとする試みも過剰生産のために失敗する。以上のような諸理由から彼等は固定資本の更新をなさない<sup>(11)</sup>。これに対してベナリは、「固

定資本の更新は不況の終り頃から開始され、それは活況の始まりとともに拡大と新投資に移行するということはひとつの事実である」という現実の事実<sup>(12)</sup>に依拠してエルスナーを批判する。即ち、景気の絶頂において固定資本を拡大することは資本家達にとつては経済的に無意味であり、この時期においては資本家達の主要な配慮は生産の拡大にかゝらずらうよりも、むしろ到達された水準の保持、生産能力の全面的稼働、労賃の圧下による価格の引き下げ、とりわけ生産された商品の実現にかゝらずらうのである。何故なら、販売は困難の度を加え、流通期間は長期化し始めるからである。

従つてベナリによれば、資本家達は固定資本の補填のためではなくて、商品の循環資金の供給のために、銀行から償却部分を引き揚げようとするであらう。更に彼等は資本信用ではなくて流通信用を必要とするであらう。或は資本家達は労働手段を買わんがために販売しようとするのではなくて、その債務を支払わんがために販売するので、そのために現金が逼迫するのである。ベナリは言う、「資本家達はその売上金で固定資本を補填するために販売すべく余儀なくされ、この追求の際に、いなかの追求を通して商品の販売の不可能性が明かになるであらう、

ということを根拠にして、高揚の際に固定資本を更新しようとする(実行不可能な)資本家達の希望を恐慌爆發の原因として特徴づけることはできない」。

第二点——エルスナーは、資本家達が償却部分を金庫にしまつたりしないでそれを金庫の中へ貯えていたとすれば、償却部分の固定資本への再転形は平滑に進捗するであらう、という意味の叙述をしている<sup>(12)</sup>。これでは貨幣資本の不足が投資活動の不振の原因だということになる。この点についてはベナリは、ペーレンスのエルスナーに対する次の批判に完全に同意している。即ち、「エルスナーが、貨幣資本に転形された固定資本はそのうちに再び投資されるので、その結果固定資本の更新が始まるときにはそれは拘束されている、と述べるとき、彼は危険にもソビエトホフの資本欠乏論(Kapitalmangeltheorie)のすぐそばに陥こんでいる」<sup>(13)</sup>。

第三点——エルスナーの述べるが如くであれば、恐慌は銀行恐慌から始まるにちがいない。ところがエルスナー自身の恐慌史の叙述もこれを示しているように、事實はこのエルスナーの理論的想定を全く裏切つている。なるほど銀行恐慌は全般的過剰生産の開始の前兆をなすものであるが、しかし恐慌史の検討

が明らかにするように、銀行恐慌は工業恐慌の爆發の前又は後に時間的にずれて發生することもあるし、或は工業恐慌が銀行の破産をともしなわずに進行することもある。銀行恐慌および信用恐慌は全般的恐慌の原因ではなくて、その随伴現象である。

### 三、恐慌、不況の持続および回復と、固定

#### 資本の再生産過程

——資本の減価を媒介として——

ベナリは問題を次のように提起する、「恐慌とそれにとりまわす不況とが固定資本の再生産過程におよぼす影響は何であるか、そしてこれと逆に、この過程が恐慌と不況およびその持続におよぼす効果は何であるか。」

恐慌とは資本制生産様式の枠内における生産力と生産関係の矛盾の爆發とその一時的解決であるが、その際不況の果す役割をベナリは次のように述べる。「両部門の生産が再び市場と釣り合いがとれ、諸部門および諸階梯の間の比例が回復されて資本の価値増殖条件が非常に好都合になり、その結果、それに先立つ循環に較べて相対的に低くなつた利潤率の基礎の上に超過利潤の獲得が再び可能となる」まで不況は持続する。そして不況

恐慌の週期性に関する A・ベナリの見解（重田）

過程を通してのこの矛盾の一時的解決（価値法則の貫徹）を資本の減価、とりわけ固定資本の減価を媒介にして考察している。

ベナリは資本の減価・固定資本の減価については更に二つの側面、即ち「一切の生産部門における固定資本の減価」と「労働手段工業の総資本の減価」の二つの側面を念頭におきながら検討を加えている。前者については、固定資本が総資本中において占める高度な割合の結果、それは総資本の減価に対して決定的に重要であること、更に固定資本の減価はそれが強制的に資本の有機的構成の低下をもたらし、それによつて価値増殖の可能性が改善されるという二点を指摘している。後者については、労働手段工業の資本の減価は、第一に社会総資本中に占めるこの部門の高度な割合のために、社会総資本の減価に対して「きわめて重要であること、第二に、資本の減価は諸部門および諸階梯の間の適切な比例の回復の前提条件であるが、高揚の際の比例の毀損は大部分がこの部面から生ずるのであるから、とりわけ重要である、とベナリは言う。従つて新しい「健全な」価値関係の回復とそれにとりまわす新しい活況の前提条件の回復も本質的にはこの二様の減価如何によるのであり、しかもこの減価の二側面は当然に相互連関的である。

恐慌の週期性に關するA・ベナリの見解(重田)

資本の全般的減価については、配当金の低落、利子率の高騰、取引所相場の低落を契機とする擬制資本の減価が述べられ、次いで価格の急速な暴落にもとづく未実現の商品資本の減価と資本家達による部分的な破壊とが先ず指摘される。ともかくその結果、「生産それ自身は縮小された階段を経過し、拡大再生産は停止される。生産手段、消費手段に対する需要は微弱である。利潤率が著しく低下するので新投資は中断される。：飛躍的に増大する産業予備軍は消費市場の活力を奪う。」不況の第一段階はこうして進行する。

ところでこのような状況のもとでは商品の販売をめぐる資本家達の斗争はもつとも尖锐な形態をとる。勿論この場合勝利者としての覇権は巨大な経営の手に落ちるが、その際固定資本の巨大な減価が発生する。即ち一方においては、この競走の闘いの経過を通じて大規模な破産が生れ、それと共に生産設備の巨大な減価(たとえ技術的に生命が盡きていようといまいと)が発生する。ところで、それと同時に勝利者の側では固定資本の道徳的磨損が発生する。即ち崩壊を切り抜けた経営は、固定資本の更新に漸次に移行せねばならない。何故なら、今やどのみち生産設備の大部分は技術的生命の最後に近づいているである

七八

う。しかもこれとは独立に競走のために、生産方法における革新・新構造が生産の再開にあたって以前よりも廉価に生産する可能性を、従つてそれによつて超越利潤を獲得する可能性を提示するので、固定資本の更新が行われざるをえない。ともかくこうしたやり方で、一切の相対的に陳腐な生産設備が社会的生産過程から排除されるのである。

こうした固定資本の補填は単純再生産を意味するが、それはまた多くの場合すでに生産の或る種の拡大でありうる。なぜなら、古い生産設備の新しいそれによる補填は生産能力の高度化をもたらし、他方低下した価格を考慮に入れるならば、同一の方法で補填する場合、より大規模の設備を調達することができるからである。さて固定資本のこうした補填は、労働手段の過剰生産を漸次に処理することによつて、労働手段工業に効果をおよぼす。そして労働手段工業における過剰生産の克服は停滞一般の克服にとつて非常に重要である。何故なら、ベナリは言う、「労働手段の生産の拡張は総生産の活況と高揚の重要な基礎であつたので、今や労働手段の生産の収縮は総生産の不況の基礎であり」、更に「恐慌の深さと持続は固定資本の大規模な拡大と更新に対して如何なる前提と制約が与えられているかによ

るところが大きい。」と。労働手段工業の不況の克服の決定重要性は、すでにしばしば述べたようにこの部門における過剰生産がことのほかに激烈であることによつて、更に強められる。従つて労働手段工業に投下された資本の剰余価値の増殖の機会が増大すれば、それは生産諸部門間の必要不可欠な比例 (*die notwendigen Proportionen*) が回復されたことの表現である。

ところで労働手段工業の資本の減価たるや、強制的過剰蓄積のために他の部門に較べてことのほかに困難な経過をたどるが、その経過はこれを妨げる他の諸要因によつて更に困難にされる。ベナリは三つの要因をあげている。

第一点——重工業部面では、資本の大部分は固定化された形態で長期間にわたつて拘束されているので、資本を流動化するのをもつとも困難である。従つてこゝでは「資本の減少は、旧設備の漸次的死滅によつてのみ、或はまた破産の場合の資本の破壊によつてのみ、行われる。」(*Hilferding: Finanzkapital S. 271* 邦訳中巻一八頁)

第二点——ところで重工業経営の破産もまた再び困難となる。というのは、これらの諸部門はとりわけ互に競走力にさほどへだたりのない大経営より成り立つているからである。かく

恐慌の週期性に関する A・ベナリの見解 (重田)

してこの斗争は再びヒルアーディングの言うように「弱者が滅されてその部面における資本の過剰が除かれるというような、弱者と強者との斗争ではなく、容易に決着のつきかねる、全戦士に一樣な犠牲を負わせる、同等者間の斗争」(*Hilferding: u. a. O. S. 272* 邦訳中巻一九頁) という形態をとるに至る。

第三点——ところがそのような大経営は銀行ともつとも深く結びついているので、後者は前者の破産を認める位なら、むしろ嬉んで一切の準備金に手をつけるであらう。

かくしてベナリはこの項を総括して言う。「従つて固定資本の再生産過程は一切の部門の固定資本の減価との関係においても、そしてまた労働手段の総資本の減価との関係においても、不況とその持続の基礎である。というのも、とりわけこれらの減価は一方において適切な比例の設定によつて決定的な条件であり、他方ではそのこと (比例の設定) は比較的強大な妨害によつて邪魔をされているからである。」

ともかく、資本の、特に固定資本の減価によつて過剰生産が取り除かれると適切な比例が回復され、これによつて価値増殖の機会是好都合となる。かくて直接的刺戟が与えられると生産が再び拡大的段階の上に行われる。固定資本の補填はその拡

張となり、投資材に対する需要は第一部門を、次いで全経済部門を活気づける。こゝに新しい高揚が始まり、同時に「その間は資本がその固定的成分によつて繫縛されている連結的な諸回轉からなる新しい循環」が始まる。

#### 四、総括

以上に展開された本文の論点を整理してベナリは次のように総括している。

(1) 循環的發展の前提は拡大的諸段階に立脚する再生産である。拡大再生産の枠内でのみ、固定資本の再生産過程——それ自身拡大的諸段階に立脚する——は週期性の基礎となることができる。

(2) 固定資本の生活過程は、個別的総資本の枠内の固定資本の回轉の意味でも、社会的総資本の枠内での労働手段の再生産過程の意味でも、週期性の物質的基礎となる。

(3) 固定資本の再生産過程の経過は、循環の経過と持続とによつて本質的なものであるが、その逆に、循環の経過と持続も固定資本の再生産過程にとつて本質的である。両者はその本質については基本矛盾によつて、その形態については、この基本矛

盾の展開されたものであるところの諸矛盾の強さと性質によつて規定される。固定資本の拡大再生産の過程は生産諸力の發展の表現であり要因であるが、それはまた、その中で生産諸力の發展が行はれるところの諸矛盾の表現と要因でもある。

(4) 固定資本の再生産過程は、労働手段の生産が総生産の高揚の基礎であるという点で活況と高揚の物質的基礎である。それは、投資活動の開始とこれらの投資の生産の完成との間の時間的へだたりが、活況の開始と現実的過剰生産との間の時間的へだたりを意味することによつて、恐慌の爆發の基礎となる。それは、全部門の固定資本の減価と労働手段工業の総資本の減価とが適切な比例の回復と好都合な価値増殖の可能性の前提であり、それによつて不況の終焉の前提となることによつて、不況の物質的基礎となる。

註(5) マルクスのこの分析視角をめぐる近代経済学の立場からの批評としては、例えばジョーン・ロビンソンは言う、「この見解（一つの通りがりのヒントとしていつたにすぎないが）は成り立たない。なぜならば、各種の異つた工場の壽命の差異は更新の周期を相殺してしまい、一方純投資の変動がこれを全く抹殺してし

まうからである。しかしこの考え方は面白い。というのは、景気循環の鍵は投資の変動にあるという考え方をマルクニがしていたことがわかるからである」(An *Essay on marxian economics* 1952, P. 46)。邦語の文献としては、高橋長太郎「固定資本の回転と投資決意」『経済研究』六卷二号がある。

- (6) この点についてのより詳細な説明としては例えばエルスナー『経済恐慌』中のこの問題を論じた箇所を参照。Oelbner, a.d. O. SS. 34~35 邦訳四二—四三頁、S. 98 邦訳一一九頁

(7) die intensive erweiterte Reproduktion なる範疇について、ベナリは「一層大規模でより近代的な装備からなる新投資が集約的拡大再生産であるのだが」と規定している。

(8) この箇所の説明においては、特別剰余価値・特別利潤なる範疇の曖昧さのために叙述が混乱しているように思われるので、筆者の方で一応このように解釈しておいた。

(9) この点に関連してエルスナーは「産業循環がこのように短縮することの原因は、蓄積とともにおこなわれ恐慌の週期性に関する A・ベナリの見解(重田)

る固定資本の規模の拡大と固定資本の回転の加速化とである」(Wirtschaftskrisen S. 107 邦訳一三〇頁)と述べているが、それ以上の展開・論証はおこなわれていない。

- (10) 本書の書評としては、邦文では戸原四郎氏のもの(『社会科学研究』五卷四号)、吉信庸氏のもの(『経済論叢』七三卷六号)、常盤政治氏のもの(『三田学会雑誌』四八卷一—二号)がある。

東独のものは F. Behrens, "Die Wirtschaftskrisen" Bemerkungen zu einem Buche F. Oelbners, *Neue Welt*, Nr. 12. 1949 があるが、筆者は未見である。

- (11) 詳細な内容については Oelbner, a. O. SS. 104~5

邦訳一二七—一二八頁参照

- (12) Oelbner, a. O. S. 104 邦訳一二六頁参照

- (13) 註(10)のハーレンスの書評文がそれである。

むすび

以上でベナリの論文の紹介を終る。その対象が複雑であり、論点が多岐にわたっているため、今はその内容の立ち入った批評を加える余裕はない。それは次の機会に譲って、ここでは二

## 恐慌の週期性に関するA・ベナリの見解(重田)

八二

三の点についての批評にとめておこう。

エルスナーもまた、その著書『経済恐慌』中の恐慌の週期性と固定資本の回転との関連の説明において、「固定資本の回転を社会的再生産の全般的進行からきりはなして考察することは、もちろん誤りであろう。固定資本の更新とその拡大の規模とはそれ自身社会的再生産過程の諸要素である。」と述べている。<sup>(14)</sup>だが彼の説明は殆ど個別資本の枠内での固定資本の回転の視角からなされているか、或はせいぜい諸個別資本の単純な総計としての社会的総資本の循環と固定資本の回転との関連が考察されているに過ぎない。<sup>(15)</sup>従つてベナリの所謂「社会的総生産の枠内の労働手段の再生産過程」という意味での固定資本の生活過程の視角は、彼の考察の視野から完全に消失している。この視角を大胆にとりあげ、エルスナーの説明の不充分さと部分的な誤りを克服し、恐慌の週期性の問題の解決に新しい一步を踏み出そうと志向している点に、ベナリの本論文の基本的特徴が見出される。

その際にベナリは、一方ではレーニンによつて明確に規定された第一部門の第二部門に対する不均等発展の理論を念頭においているようである。即ち、第一部門の中から労働手段生産部

門を分離抽出して、それぞれの諸部門の間の不均等発展をとりあげ、そしてそれが一定の段階において過剰生産、過剰蓄積に陥るといふ風に論証しようとしている。ところで他方、その論証のための分析の手続として、筆者の見るところでは、かつてヒルフアーディングが『金融資本論』の恐慌に関する理論的分析の際に採用した手法が利用されている。<sup>(16)</sup>不均等発展の不均衡発展への転化、過剰生産、過剰蓄積の傾向を検出するにあつて、それぞれの生産部門における価格上昇の性質の差異、とりわけ資本の有機的構成の相異から生ずる価格形成の差異にもとづく利潤率の不均等を媒介にして、この傾向の必然性を論証しようとするのが、即ちそれである。ところがヒルフアーディングのこのような分析手法については、恐慌を「生産諸部門間の比例の破壊」に矮少化し、それを「流通における諸経過」の問題である「価格形成における攪乱」に還元している、といふエルスナーの批判がある。<sup>(17)</sup>筆者はエルスナーのこの批判に完全に同意するものでもなく、それにまたヒルフアーディングの方法とベナリのそれが全く同一視されるべきものだとも思わないが、この点は更に一層突込んで検討されるべきであろう。<sup>(18)</sup>

以上のようなマルクス主義恐慌論の二つの古典的業績を前提

とし、その積極的な利用の上に立つて、「労働手段の拡大生産の過程は循環の経過に対して決定的な意義を獲得した」という視角よりベナリは恐慌の週期性の問題の解明に向う。その際ベナリによつて強調される特徴的な手法は、「投資活動の開始とそれの生産の完成との間の時間的へだたり」という視角<sup>(19)</sup>であつて、この点は固定資本の回転と、活況および高揚の持続の基礎或は恐慌の爆発の基礎との関連の分析において、さまざまに利用されている。ところでこのような分析手法については、それが結局資本制的生産諸関係を抽象して、問題を生産一般に固有の技術的關係に還元しているとはいへ、アフタリオンを起点とする近代景氣理論の一つの流れにおいて、分析用具として或る意味では精密化され洗練されてきたところであつた。従つてこゝにあらためて両者の關係、厳密には対決が問題とされねばならぬであらう。

不況の持続、深さおよびそれからの回復と、それにおよぼす資本減価、とりわけ固定資本の減価の作用については、これまでの恐慌の週期性の研究でも一応は言及されてきた。しかし固定資本の再生産過程という視角よりその様々な側面に照明を与えている点で、ベナリの本論文は更に一段とゆきとよいた詳細

恐慌の週期性に関するA・ベナリの見解(重田)

な説明と分析をおこなつており、その意味で今後問題のこの面の分析を深めてゆく上で教えられるところが大きいのではあるまいか。

更に細かい点を検討してゆけば、特別剰余価値、特別利潤という基礎的な範疇の把握をめぐつて、或は流通信用と資本信用というヒルファーディングの信用把握の仕方<sup>(20)</sup>を無条件にそのまま踏襲している点をめぐつて、その他様々な疑点を残している。

最後にいま一つ疑点を投げておこう。その論題も示すように、分析の対象は「独占期以前の資本主義」という資本主義の特定の発展段階に明確に限定されていた。しかるに行論の中では、しばしば独占資本主義段階に特徴的な諸様相が混在せしめられているように思われる。例えば資本信用と銀行の役割の評価の仕方において、或は特に恐慌、不況期における労働手段工業での資本の減価を妨げる諸要因の説明においてそうである。

以上のような疑点、或は論証の不充分さをもつていゝものは、従来とかく停滞の傾向の強かつた研究のこの分野で大胆な一歩を進めようとしている点において、注目に値するものがあるので、こゝに紹介の筆をとつた次第である。

恐慌の週期性に關するA・ヘナリの見解(重田)

註(14) F. Oelbner: a. a. O. S. 107. 邦訳一三〇頁

(15) この点については「この過程を一つの個別的資本の

例で説明しよう」(Ebenda, S. 104 邦訳二二六頁)と

いう言葉で始まる説明の仕方に端的に示されている。

(16) Hilferding: a. a. O. SS. 379~393 邦訳中卷一四七

一六三頁

(17) Oelbner: Vorwort zur Neuauflage, *Das Finanzkapital* 1955, SS. XXVIII~XXX

(18) エルスマーのヒルファデーニング批判に基本的には

同意するが、現実的恐慌への接近のためにはヒルファ

デーニングの用いた分析方法が何らかの形で導入され

ねばならぬと考える。このことは、マルクスが当面の

論理段階では捨象されるときはことわつた「競走

論」の問題と関連する。ヒルファデーニングとヘナリ

の差異については、前者が「不比例説」的誤りに陥つ

ているのに対して、後者には週期性の問題を、ともか

く基本矛盾及びそれから展開される諸矛盾と結びつけ

ようとする努力が見られる。

(19) この視角もヒルファデーニングがすでにとりあげて

いる。例えば a. a. O. S. 387 邦訳中卷一五六頁参照。

(20) マルクスにあつては、信用の基本的な形態は商業信

用と銀行信用である。ヒルファデーニングの信用把握

に対する批判としては古沢友吉「金融資本論に關する

一研究」『一橋論叢』二九卷二号、鈴木喜久夫「ヒル

ファデーニングの信用理論」『経済学』三九 一九五五

年 No. 4 参照。

執筆 者 紹 介

- 杉原 四郎 本學教授(經濟學部)
- 東井 正美 本學助教授(經濟學部)
- 佐藤 博 本學助手(經濟學部)
- 重田 晃一 本學助手(經濟學部)